

陽黑點や地磁氣に直接關係があるので、之が研究も行はれる筈である。

この計畫に参加する我國は、直接極地に出かけるのではないが、富士山頂に於ける上層氣流の觀測及び樺太に於ける磁氣觀測を行ふと同時に、毎日極地からの通信によつて一年間、極の天氣圖を作製する積りである。尙ほ富士山頂には目下觀測用の半永久的廳舎を築造中であるが、觀測係主任三浦技師は富士山頂觀測の指揮に當り、豫報係の畠山技師及茨城縣柿岡にある磁氣觀測所の今道技師等は樺太に出張して磁力の検査を行ふ筈である。

黃 道 光 會 議

「極年」 Polar Year (又は「極地觀測」)の一部として、純天文學上から行はれるべき事業は、報時信號と太陽黑點と、黃道光と、流星と、此の四方面であるが、其のうち黃道光に關する準備の會議が去る7月20-21日、近江の石山の柳屋旅館で開かれた。主催は天文同好會觀測部、來會者は山本一清、荒木健兒(課長)、龜井壽彦(幹事)、中村要、稻葉通義、小山秋雄、阪元鐵馬、山田長、廣瀬永次郎、佐々木一二の十氏であつた。

七月20日十四時開會。まづ課長より來集各氏の紹介あり。次いで山本會長の演説「黃道光研究の世界現勢」が約一時間あつた。それから荒木課長の觀測研究現況報告があり、ついで豫定順序により一同自動車をつらねて大津市石場の藤井天文臺を訪ねた。本會名譽會員藤井善助氏の歡待を受け、愉快を盡して十八時辭去、石山に歸る。十九時、會長招待の晚餐會。二十時半から協議會に移つた。荒木課長を座長とし、ボーラー・イヤルに關する解説と觀測計畫、黃道光觀測の方法に關する研究と討議、黃道光に關する現在の學界の諸問題、會員中の黃道光觀測者の指導獎勵及び新募等々、時計が二十三時を過ぎるまで、勢田川の涼風を滿喫しながら談じ續けた。阪本氏より見せられた水晶玉の黃道光寫眞は興味の中心であつた。此の夜は諸問題を雜然と話し合つた形で、其のまゝ就寢。

翌21日朝早く古刹石山寺を訪ねた、八時朝食、九時から協議會再開、昨夜に續いて、主として觀測方法とプログラム、及び、通信發表等の形式に關する事項を、いろいろと決議した。詳細は課長より課員一同へ通知せられ、又、觀測部報として「天界」に載せられる筈。二十三時閉會。それから一同は大津を経て、花山天文臺へ來訪した。